

# 米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会 による明治期の日本における文書活動 - 雑誌『常磐』を中心として -

齋藤 元子

## 1. はじめに

19世紀アメリカのプロテスタント教会は海外伝道に力を注ぎ、世紀後半には主要教派の大半に女性海外伝道協会<sup>1</sup>が設立されて、多くの女性宣教師が世界各地に送り出された。メソジスト監督派教会においても、1869年に女性海外伝道協会が組織され、1874年より日本への女性宣教師派遣が開始された。<sup>2</sup>日本における女性宣教師の活動は、女学校を創設したことでよく知られており、青山学院、活水学院、遺愛学院などの学校史を通じてその功績が今日まで伝えられている。女学校の運営は女性宣教師による最大の活動であった。しかし、それ以外にもキリスト教伝道を目的として、女性宣教師が日本の女性に対する啓蒙活動を展開していたことは、これまで十分に評価されてこなかった。

その一つが文書活動(printed evangelism)である。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は1897(明治30)年、横浜の山手に常磐社という出版社を

---

<sup>1</sup> woman's foreign missionary society を指す。これまで婦人海外伝道局、婦人外国伝道協会、婦人外国宣教協会などと訳出されてきたが、本稿においては女性海外伝道協会の訳語を用いる。

<sup>2</sup> メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は15万1千人の会員を擁する教派間で最大の女性海外伝道協会を形成した。女性海外伝道協会成立の背景に関しては、拙稿「19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動」お茶の水地理40, 1999年,

起こし、出版物を通して日本の女性や子供にキリスト教さらには西欧文化を伝える活動を行っていた。常磐社は関東大震災により全資産を消失し惜しくも閉鎖されたが、その間 26 年にわたって地道な出版活動を続け、天災さえなければ更なる発展が期待できるものであった。だが、この常磐社の活動の実態は、まとまった記録が残されていない。協会機関誌 *Woman's Missionary Friend* にも常磐社に関する記事は少なく、社の設立とその後の順調な運営報告が散見される程度で、詳しい出版物の内容などを紹介したものはほとんど見当たらない。<sup>3</sup> 特集を組むなどして、活動状況が詳細に伝えられている女学校の運営とは対照的である。

日本における文書活動が、なぜ機関誌を通じて、アメリカの会員に広く伝えられなかったか、その理由として以下の 2 点が考えられる。まず 1 点目は、文書活動の中心を担った二名の女性宣教師が、ともに自給宣教師 (self-supporting missionary) であったこと。彼女たちは給与や活動資金を協会に依存しなかったため、機関誌を通じてその活動を詳しく紹介し、会員の賛同を得て、援助の献金を募る必要性がなかった。2 点目は、日本語というアメリカ人には馴染みのない言語による出版活動であったこと。アメリカ在住の機関誌編集者が、常磐社の出版物を受け取ったとしても、その内容を理解して紹介を試みるのは不可能であったと推測できる。

日本における女性宣教師に関する研究は、まだ多くの蓄積がなく、しかも

---

33 - 38 頁参照。

<sup>3</sup> 機関誌 *Woman's Missionary Friend* は、協会設立の直後に *Heathen Woman's Friend* という誌名で月刊誌として創刊され、1896 年に *Woman's Missionary Friend* と改名され、1940 年 8 月まで 70 年以上にわたって発行された。その主な内容は、世界各地に派遣されている女性宣教師からの書簡を掲載して伝道地での活動状況やその国の地理、歴史、文化などを紹介することを中心に、その他ホーム・ベース活動と呼ばれるアメリカ国内での勉強会や募金運動などの活動の様子、女性宣教師の採用人事、会計報告などが盛り込まれていた。機関誌の詳細に関しては、拙稿「"アメリカ人女性宣教師の異教地報告" 研究序説 - Feminist Historiography of Geography への位置付けとして - 」お茶の水地理 41, 2000 年, 19 - 24 頁参照。なお、*Woman's Missionary Friend* 掲載の常磐社に関する記事は、以下の箇所などに見られる。29 - 7, 1898, p.200; 30 - 1, 1898, p.5; 30 - 11, 1899, p.417; 31 - 4, 1899, p.119; 31 - 8, 1900, p.285; 32 - 1, 1900, p.9; 32 - 3, 1900, p.84; 32 - 4, 1900, p.133・p.137; 33 - 1, 1901, p.6; 33 - 9, 1901, p.317; 33 - 12, 1901, p.426; 34 - 2, 1902, p.48; 35 - 5, 1903, p.159; 37 - 2, 1905, p.46; 38 - 7, 1906, p.236.

その大半は女学校との関連で論じられたものである。<sup>4</sup> 本稿は、これまでほとんど触れられていない女性宣教師による文書活動を、現在も残されている出版物の一部を手掛かりにして、明らかにすることを目的とする。

## 2. ジョージアナ・ポーカスとエマ・ディキンソン

1897(明治30)年、ジョージアナ・ポーカス(Georgiana Baucus)とエマ・ディキンソン(Emma Dickinson)という二人の女性宣教師によって、横浜山手に美以教会女子伝道会社<sup>5</sup>の文書活動(printed evangelism)の拠点となる常盤社が設立された。

ジョージアナ・ポーカスは1862年11月12日ニューヨーク州ドライデンに生まれた。小学校教師を経て、1890(明治23)年メソジスト監督派教会女性海外伝道協会ニューヨーク支部の派遣により、7月13日函館の遺愛女学校に着任。翌年弘前に移り、1895(明治28)年まで弘前女学校の校長を務めた。その後、米沢英和女学校で短期間教鞭を執った後に帰国し、世界周遊の旅に出る。途上のエルサレムにてエマ・ディキンソンと出会い、日本にて文書による伝道に従事する決意を固める。

エマ・ディキンソンは1844年11月29日ニューヨーク州フェアポートに生まれた。自活できるほど裕福な長老派の教会員で、医学博士号を取得し幼稚園教諭の経験もあった。また音楽家、画家、作家としての優れた才能も持ち合わせていた。

ポーカスとディキンソンはともに自給宣教師(self-supporting

---

<sup>4</sup> 来日女性宣教師に関する研究の最も体系的なものとしては、長老派を事例とした以下の文献が挙げられる。小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 - 来日の背景とその影響 -』東京大学出版会、1992年、345頁+10。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会に関しては、以下の文献が挙げられる。本多繁「メソジスト監督教会婦人外国宣教師協会と明治前期に於ける日本での活動 - 東北地方を中心として -」東北文化研究紀要 17, 1985年, 1 - 43頁。本多繁「米国の婦人外国宣教師機関とメソジスト監督教会の在日活動 - 忘れられた明治の婦人宣教師達 -」、『続・米国のプロテスタンティズムと日本人 - 忘れられた明治の基督教学校と宣教師達 -』丸善仙台支店、1994年, 1 - 118頁。

<sup>5</sup> 美以教会女子伝道会社はThe Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church(メソジスト監督派教会女性海外伝道協会)の当時の日本語名称。

missionary)として1897年8月24日にサンフランシスコを発ち、9月20日横浜に到着した。そして横浜山手 262 番地に土地を借りて常磐社を設立し、日本の女性と子供に向けたキリスト教文書の出版に着手する。出版物は月刊誌、小冊子、パンフレット、広告チラシ、絵葉書、楽譜など多岐にわたった。またポーカスはメソジスト監督派教会女性海外伝道協会日本年会の書記をも10年間務め、年会報告書の編集発行を担った。

1923(大正12)年9月に起こった関東大震災により、常磐社は資産を悉く失った。ポーカスとディキンソンは日本を離れ、マニラ、オーストラリアを経てアメリカへ帰国する。カリフォルニアで日本向けの出版活動を続けようとしたが、ポーカスが1926年4月8日、ディキンソンも同年11月6日、ともにカリフォルニア州パサディナにおいて人生の幕を閉じた。<sup>6</sup>

### 3. 常磐社の出版物

国際基督教大学アジア文化研究委員会編集の『日本キリスト教文献目録 明治期』(1965年)によると、常磐社から発行された出版物で現存するものは18種類を数える。その書名を挙げてみよう。

常磐社創立の翌年から関東大震災に遭うまで発行された月刊雑誌『常磐』(一部現存)伝道用書として『めでたきクリスマスの贈物』(ポーカス編,1900年)、『蝶々の願ひ』(1900年)、『何故こどもは死にましたらふか』(ディキンソン著,1902年)、『我何を汝に与ふべきか汝求めよ』(ディキンソン著,1902年)、『ナボテの葡萄園』(ポーカス著,1903年)、『左れども彼は癩病をわづらひ居る』(ディキンソン著,1903年)、『二匹の悪魔より救ひ出さる』(ポーカス著,1910年)、『しつけ系のおはなし』(ポーカス著,1911年)。キリスト論として『耶蘇一代記 少年用』(ポーカス著,1902年)、『基督小話』(ポーカス著,1911年)。聖書釈義として『彙すてる』(ポーカス著,1903年)、『旧約全書

---

<sup>6</sup> クランメル,J.W.編『来日メソジスト宣教師事典 - 1873~1993年 -』教文館,1996年,15,67頁。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館,1998年,1280頁。*Woman's Missionary Friend*, 29-3, 1897, p.71.・30-1, 1898, p.5.

一年研究』(ポーカス・ディキンソン著,1909年)。文学書として『なくした一つの言葉』(ヴァン・ダイク著,ポーカス訳,1900年)、『常磐小説』(ポーカス編,1903年)、『天路歷程 - 小児のため - 』(ポーカス訳,1903年)。その他に『常磐唱歌集演芸集第二』(ポーカス著,1910年)、『さんびか』(常磐社編,刊年不祥)がある。

また、現存する雑誌『常磐』に掲載されている新刊広告として、上記のほか、『朝のをしへ』(1905年)、『常磐西洋料理』(1905年)、『日曜学校 50 教則』(1905年)、『神は如何なる者ですか』(1906年)、『神は何処に在すか』(1906年)、『軍人の説教』(1906年)、『文字の福音 第一』(1907年)、『文字の福音 第二』(1907年)が見られる。書籍以外にも、日曜学校用のカードとして『日曜学校趣意かけ絵解カード』(1905年)、『綴合せ題詞カード』(1908年)、『聖書の絵説きカード』(1908年)、『虹の鎖 約束の札』(1908年)、『二十六福の札』(1908年)、カレンダーとして『常磐ごよみ』(1906年)が製作販売されていた。

これら小冊子類の発行年を見ると、すべて 1900(明治 33)年以降である。1897(明治 30)年に常磐社を設立し、翌年月刊誌『常磐』を創刊、『常磐』の発行が軌道に乗り、経営が安定したのを見極めてから、書籍等の出版に乗り出したものと考えられる。常磐社の出版目録に関する広告が、1905(明治 38)年から『常磐』に掲載され始める。この点から推測すると、1900年前後から月刊誌に加え、書籍の出版も開始し、5年後には目録を作成できる程度の出版物を持っていたと言えよう。

常磐社の出版物の柱をなしていたのは、疑いなく雑誌『常磐』であった。関東大震災による不本意な廃刊を迎えるまで、創刊以来 25 年にわたって一度も休止することなく、毎月発行された軌跡は検証に値するものである。次章では、雑誌『常磐』に詳しく触れることとする。

#### 4. 雑誌『常磐』

雑誌『常磐』は 1898(明治 31)年 1 月、ポーカスを編集人、ディキンソンを発行人として創刊された。巻頭に掲げられた「新年の祝詞」の中に『常

磐』の編集方針がよく示されているので、その部分を引用したい。

嗚呼がましきに似たれども妾等が竊かに「ときは」の天職として期する  
所はわが敬愛する日本の婦人が神を信ずる念の堅きと其善き行の變ら  
ざるとは左ながら松の木の深く根ざして色かへぬ如く又世のあしきさま  
にけがれざること蓮の清くして美しきが如くあらんことを願ひ何事に  
てもすべて古き物事は皆之をうち棄てひとへに唯新らしきものをのみ採  
り用ゆるは妾等の勤むる所にあらずむかしより日本に數おほき貞婦  
烈女の妾等の龜鑑として學ぶ可きもの元より鮮きにあらず左れど昔と  
今とは世のさまもうつりかはりて婦人の美德の新たなる模範も出でぬれ  
ば妾等はそが嘉きものをのみ學びて之に倣はんことを奨め參らす

(『常磐』1 - 1, pp.1 - 2, 1898)

『常磐』が志したのは、キリスト教信仰に基づく品行方正な生活の提示であつた。それは、鹿鳴館に象徴されるような「近代化」という名のもとに、欧米のライフスタイルを皮相的に模倣することを奨励するのは、明らかに異なっていた。日本の伝統文化によって育まれてきた旧来の日本女性の生き方にも、学ぶべき点が多くあることを認識し、欧米諸国との交流によってもたらされた新しい知識や情報を盲信することなく、両方の利点を掬い上げて紹介しようという姿勢が打ち出されている。西欧の価値観やライフスタイルの一方的な押し付けではない雑誌作りを目指したことが、『常磐』の息長い刊行を可能にしたのは疑いない。この編集方針が、具体的にどう誌面に反映されたかは、後に詳しく検証する。

第2号の巻頭では、第1号の感想を早速読者に問うている。「高尚な生活思想や修養の一助となるべきものを見いだすことができたか。記載した事柄は飲み込みにくくなかったか。これまでの価値観とあまりに隔たりがあるゆえに無視せざるを得なかったか。もし何か差し支えがあったならば、それがどんなことであるのかを知らせてほしい。読者が知りたいと思っていることを記載しているか。読者に少しでも利益になることを取り上げているか。それらを切に知りたいと欲しているので、どの記事が役に立ったかをぜひ書き送ってほしい。できる限り一人一人に返信するつもりである。」(『常磐』1

- 2, pp.1 - 2, 1898) という旨を記している。さらに、第 10 号においては「宗教問題はもとより、料理、衣服、衛生など生活に関するよいアイデアがあったら書き送ってほしい。皆でそれを共有し、読者と社員が力を合わせて『常磐』を有意義な雑誌にして行こう」(『常磐』1 - 10, pp.3 - 4, 1898) と呼びかけ、読者との対話を重視し、読者参加型の雑誌を目指していることを明確にしている。

『常磐』の定価は一部五銭、年間購読料は五十銭であった。1908 (明治 41) 年 4 月に年間購読料が初めて六十銭に引き上げられるまで、創刊以来 10 年間同一料金が維持されたことになる。頁数は第 1 号から第 11 号までは 32 頁。第 12 号は読者へのクリスマス・プレゼントと銘打って 38 頁に増頁された。第 2 巻(1899 年) は 38 頁、第 3 巻 (1900 年) 以降は 40 頁あるいは 42 頁で発行された。発行部数は 36 部を配達、260 部を郵送と第 3 号に記録があり(『常磐』1 - 3, p.5, 1898) 創刊当初は 500 部を越えるものではなかったと推測できる。対象とした読者は、美以教会の女性教会員ならびにその家族や友人などであったが、社会階層としては「家事を下女任せにしない」(『常磐』1 - 7, p.25, 1898・2 - 2, p.23, 1899) 「私の車夫は月給で雇いました者で」(『常磐』1 - 5, pp.29 - 31, 1898) 「家僕に庭、物置などの大掃除をさせ」(『常磐』1 - 10, p.25, 1898) といったような記述から、使用人を雇うことのできる中流以上の家庭の女性を対象としていたことが窺える。また毎号巻末には、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会により設立された女学校である横浜の聖經女学校、長崎の活水女学校、函館の遺愛女学校などの学校案内が掲載され、女学生に休暇中の読み物として『常磐』の購読を勧めている(『常磐』8 - 6・7・8, 広告.1905) 点から見ると、女学校に対する読者の関心を促すと同時に、女学生をも読者層に取り込もうとする女性宣教師の教育活動と文書活動の連携が読み取れる。

さて『常磐』の内容であるが、その広告記事を紹介すると「常磐と云へる婦人雑誌は旅行記や、育児法や、料理や、衛生や、面白き物語や、珍しき出来事や、其他婦人傳道者の心得となるべきことは更なり、信者の家庭や、日

曜學校に用ゐる様な面白き讚美歌なども、収めてみな此雑誌にあり」<sup>7</sup>と謳われている。これらの中で早くからシリーズ化され、ほぼ毎号掲載されている旅行記と料理の欄を取り上げ、本章の始めに触れた『常磐』の編集方針が、どのような形で誌面に反映されているかを考察してみよう。

旅行記は創刊号より登場し、第5号からは「たび」と名称がつけられている。多くの号において巻頭に掲載され、看板読み物として位置付けようとする意図が窺える。旅先は海外が大半を占め、例を挙げると、カルカッタ(1-1・1-2・1-4)、エルサレム(1-3・2-4)、ベタニア(1-5)、ヴェニス(1-6・1-7)、ライン川(1-8)、ジュネーブ湖(1-9)、ジャマイカ(1-11)、ビルマ(1-12・2-2)、オランダ(2-1)、ハワイ(2-3・3-1・3-2)、イタリア(2-5・2-6・3-11)、ナイアガラ滝(3-3)、ロンドン(3-4・3-8・3-9・11-3)、パリ(3-10)、ヒマラヤ(9-7・9-8)、フロリダ(10-6・10-8)、サンフランシスコ(11-2)など広い地域にわたっている。ヒマラヤとフロリダの旅行記には、ポーカスとディキンソンの署名があるが、それ以外は無記名である。しかし、すべてポーカスとディキンソンによって書かれたとみて間違いはない。文書活動のために来日する直前に体験した世界周遊の旅を題材にしたものであろう。

国内旅行に関しては、箱根(1-10)、鎌倉(4-7)、四谷見附より尾張町まで(7-9)、冬の旅館(10-4)、上総(10-8)、富士山(10-9)などがみられる。国内の名所古跡は、読者にとって旧知の場所であるに違いないが、未だ訪れたことのない人もいるはずなので、取り上げることにする(『常磐』1-10,p.5,1898)と説明している。したがって、旅行記の主たる目的は、読者が旅していない場所についての話題を提供することにあると読み取れる。

海外旅行は多くの読者にとって気軽に実現できるものではなかったが、旅行記を興味深く読めるに充分な知識を、読者は持ち合わせていたと推測できる。読者の社会階層から判断して、彼女たちの大半は女学校あるいはそれ以上の教育を受けていたと思われ、女性宣教師により設立された女学校に学んだ者が多かったはずである。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会設立の

---

<sup>7</sup> ポーカス,G.編『常磐小説』(常磐社,1903年)の巻末に掲載された雑誌『常磐』の広告記事より。

女学校では、日本の地理・歴史を学んだ後、外国の地理・歴史を週3時間程度学ぶカリキュラムが組まれていた。<sup>8</sup> したがって、世界の地理や歴史の基礎知識を身につけていた読者は、海外についてより詳しく知りたいという潜在的な欲求を抱えていた可能性が高い。ポーカスとディキンソンは読者の理解力を見極め、海外旅行記の連載を通してその要求に応えたと言える。

次に料理欄であるが、『常磐』に料理の記事が登場するのは第2巻、1899(明治32)年からである。第2巻は割烹料理、第3巻(1900年)は料理の代わりに和服裁縫、第4巻(1901年)から手軽西洋料理と名付けられた欄が始まる。第2巻の割烹料理は、岡野知十という編集スタッフと思われる女性が、青山女学院女子手藝部の割烹教授赤堀峰吉氏より指導を受けた献立を「当季の手料理」と題してレポートしたものである。季節の素材を使った手料理が伝授され、特に鱈(2-1)、鯛(2-3)、鰹(2-5)、鰯(2-6)、スズキ(2-6)などの魚の捌き方が丁寧に報告されている。第3巻の和服裁縫も割烹料理同様に、富田たかという女性が渡邊辰五郎氏の教授法をレポートしたもので、必用品の紹介(3-1)に始まり、針の運び方(3-1)、一ツ身襦袢(3-2)、三ツ身襦袢(3-4)、女長襦袢(3-5)、男単衣(3-6)、男袴(3-6)、男単羽織(3-7)、袴(3-9)、女袴(3-10)、男綿入(3-11)、女重着(3-12)などの作り方が指導されている。毎回イラストを多く用い、簡単なものから徐々に難易度の高いものへと進んで行く方法には、学びやすさへの配慮が窺える。

第4巻(1901年)より「手軽西洋料理」が始まる。この欄は20年以上続き、後に『常磐西洋料理』『常磐西洋料理補遺』『常磐病身者の西洋料理』のタイトルで単行本化される。<sup>9</sup> 西洋料理の紹介は、アメリカ人女性が編集発行する雑誌の顔になり得ると、ポーカスもディキンソンも充分予想していたであろう。しかし、彼女たちは「手軽西洋料理」の連載を創刊号からではなく、割烹料理と和裁を紹介した後に開始している。それは意図した行為と考

<sup>8</sup> 本多繁，前掲注4，1994年，83, 85, 86, 94, 95頁。

<sup>9</sup> 現存する『常磐』で、筆者が確認できた最新号は、1921(大正10)年の第24巻第11号である。この時点まで「手軽西洋料理」は掲載されていたので、2年後の関東大震災により廃刊となる第26巻の最終号まで継続していたと思われる。

えられる。『常磐』が創刊された 1898(明治 31)年の社会状況から推測して、西洋料理の紹介は時期尚早と判断したのではないか。『常磐』の読者とほぼ同じ社会階層に属するエリート・サラリーマンの妻が、『常磐』の創刊年と同じ 1898 年 6 月から翌年 7 月に書いた日記がある。<sup>10</sup> この日記には明治期の中産階級の日常生活がつぶさに描かれているが、西洋料理はまったく出てこない。<sup>11</sup> 日記の著者はクリスチャンではなかったが、クリスチャンの家庭でも当時の食生活は大差なかったのではないだろうか。都会ですき焼き、コロッセなどの肉食が家庭料理に取り入れられるようになるのは、1910(明治 43)年以降のことである。<sup>12</sup> 1900 年代に入ると、婦人雑誌に西洋料理に関する記事が登場し始める。早いもので『婦人界』の 1903(明治 36)年、『女学世界』の 1905(明治 38)年の記事がある<sup>13</sup> が、『常磐』の「手軽西洋料理」欄のスタートはその先駆けをなすものである。

「手軽西洋料理」を担当したのは、ピンフォード夫人ことフレンド派(クエーカー)の宣教師ガーニー・ピンフォード(Gurney Binford)の妻エリザベス(Elizabeth)であった。ガーニー・ピンフォードは、米国カンザス州出身でフレンド派カナダ年会女性海外伝道協会派遣により 1893(明治 26)年 11 月に来日した。始めは東京で活動していたが、1899(明治 32)年エリザベスと結婚して水戸で伝道に従事する。国粹的な土地柄にあって 12 ヲ所で集会をもち、青年のためにバイブルクラスを開き、エリザベスは女性に料理や裁縫を教えた。1914(大正 3)年には農村伝道を志して下妻に移り、エリザベスをサイドカーに乗せ、村々を回っては天幕伝道を行った。200 名収容の大天幕を張り、夜は提灯をともし、太鼓をたたいて人々を集めては話をしたり幻灯を見せ、エリザベスは讚美歌を歌い、食事を振る舞い、“ピン先生の天幕伝道”として村祭り同様名物の感があったそうである。1936(昭和 11)年日本友会(the Society of Friends in Japan)50 周年を祝った後に帰国し

<sup>10</sup> 小林重喜『明治の東京日記 - 女性の書いた明治の日記 -』角川書店, 1991 年。

<sup>11</sup> 前坊洋『明治西洋料理起源』岩波書店, 2000 年, 244 頁。

<sup>12</sup> 岡満男『この百年の女たち - ジャーナリズム女性史 -』新潮社, 1983 年, 132 頁。

<sup>13</sup> 両誌の記事は調理の参考になるほど正確なものではなく、単なる読み物であった。岡満男, 前掲注 12, 131 頁。『婦人界』は 1902(明治 35)年、『女学世界』は 1901(明治 34)年に良妻賢母の育成を目的として創刊された婦人総合雑誌。

た。<sup>14</sup>

ピンフォード夫人は、水戸での伝道の傍らに「手軽西洋料理」を手掛けたことになる。「ピンフォード夫人述」と記載されていることから、ピンフォード夫人が語ったものを編集スタッフが書き起こしていたと考えられる。教授された料理は、シチュード・フルーツ（4-6）、金柑マーマレード（4-6）、胡瓜のピクルス（4-7）などの保存食、ライスカレー（4-7）、弁当のサンドウィッチ（7-7）、卵料理（10-4）、病人食（10-6）、ジンジャーエールやアイスコーヒーなど夏の飲み物（10-8）、クリスマスへの献立（10-12）、スープ類（11-3）などバラエティーに富んでいる。「昨年の夏のことなりしが當地水戸の婦人方は特別に桃や梅や梨をシチユド、フルーツになしたるものを賞翫せられたり。市中には未熟の果實を賣出すゆゑシチユド、フルーツは大切に殊に子兒のためには最も必要なりとす。」（4-6）といったように、水戸で日本人女性に料理を教えている様子が語られ、その経験が誌面に生かされている。つまり「手軽西洋料理」を単なる読み物としてではなく、実際に作ってみようという気持ちを日本人女性に起こさせるような欄にしよう、水戸での体験を踏まえて、材料の選び方から調理器具の手入れの仕方に至るまで丁寧に解説されている。

以上「たび」と「手軽西洋料理」という2つの欄を例にとり、『常磐』の内容をみてきた。「たび」とにおいては、読者に世界の地理や歴史の基礎知識があると判断するや、世界各地のより具体的な情報を、旅行記という読みやすい体裁を取って、積極的に伝達している。一方「手軽西洋料理」においては、創刊当時、読者にそれを受け入れる土壌がまだ形成されていないとみて、まずは日本料理と和裁を教授し、その後に時期を見定めてから連載を開始している。この姿勢は、章の始めに紹介した『常磐』発刊の辞に示された編集方針をよく反映している。すなわち、西欧文化を無分別に伝授するのではなく、日本古来の伝統文化にも学ぶ点があることを認め、双方のよい点を吟味して紹介して行こうとする姿勢である。啓蒙雑誌といえども、高

<sup>14</sup> 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、前掲注6、1184頁。キリスト教人名辞典編集委員会編『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版局、1986年、1209頁。戸田徹子「日本フレンド伝道の歴史」日本宗教史研究年報7、1986年、42-85頁。

みに構えるのではなく、読者とともを考え学ぶ雑誌作りを心掛けたことが、読者の支持を得て、20年以上に及ぶ『常磐』の歴史を刻む結果となったと言えそうである。

## 5. 明治期の婦人雑誌ジャーナリズムと『常磐』

明治期には150を越える婦人雑誌が創刊された。啓蒙誌、文芸誌、団体機関誌など多種多様であったが、3号雑誌と呼ばれる短命なものが少なくなった。<sup>15</sup> その中において『常磐』が20年以上にわたり発行されたことは評価に値する。にもかかわらず、日本の婦人雑誌ジャーナリズムに関するこれまでの研究において、『常磐』に言及したものは一つもない。<sup>16</sup> そこで本章において、『常磐』が明治期における婦人雑誌ジャーナリズムの中にいかに位置付けられるかを明らかにしたい。

『常磐』の創刊当初の発行部数は、前章で推定したように、500部以下と考えられる。その後、どの程度部数を延ばしたか定かではないが、キリスト教と関係の深い他の婦人雑誌『女学雑誌』の145,842部(1899年)や『婦人新報』の14,328部(1899年)などに比べれば、微々たるものには違いない。<sup>17</sup> では、知名度という点からみるとどうであろうか。1900(明治33)年5月号掲載のニュースとして「『常磐』はこれまでメソジスト監督派という一教派の雑誌であったが、他の雑誌が『常磐』と合併することになり、有力なキリスト教主義の雑誌が誕生することとなる」(『常磐』3-5, p.40, 1900)

---

<sup>15</sup> 中島邦「『日本の婦人雑誌 - 明治編』の監修にあたって」、中島邦監修『日本の婦人雑誌 解説』大空社、1986年、巻頭。

<sup>16</sup> 明治期の婦人雑誌ジャーナリズムに関する研究の代表的なものとして次の文献が挙げられる。近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年。また、明治期のキリスト教ジャーナリズムに関する研究においても、婦人雑誌ジャーナリズム同様、『常磐』に言及したものは全く見当たらない。明治期のキリスト教ジャーナリズムを論じた文献として以下のものなどがある。辻橋三郎「明治期キリスト教ジャーナリズム」、辻橋三郎・高道基『近代日本文化とキリスト教』教文館、1967年、36-98頁。

<sup>17</sup> 三鬼浩子「明治婦人雑誌の軌跡」、近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社、1989年、11・33頁。『女学雑誌』は巖本善治を主筆としてキリスト教に基づく社会改良と婦人の啓蒙を目指した雑誌。『婦人新報』は矢島楯子らによって発行された日本基督教婦人矯風会の機関誌。

と伝えている。しかし、それがどの教派の雑誌との合併であるのか詳細は語られていない。また、それ以降の誌面作りに変化はみられず、巻末には依然メソジスト監督派教会女性海外伝道協会創立の女学校のみが紹介され、発行所も美以教会女子伝道会社・常磐社のままである。したがって、上述の合併が実現したかは疑問が残るが、他教派の雑誌から合併の打診を受けたことは事実であり、他教派に『常磐』の存在が知られていたことも確かであろう。第4巻(1901年)より「手軽西洋料理」の担当者として、フレンド派宣教師夫人であるピンフォード夫人を迎えていることから、フレンド派にも読者がいたと思われる。だが、その一方で、1909(明治42)年、組合派本郷教会の海老名弾正の主宰する新人社から『新女界』が創刊される際、雑誌名の候補の一つとして『ときわ』の名称が挙がっている。<sup>18</sup> 他教派と競合する雑誌名を敢えて選ぶとする意図は考えにくいので、『常磐』の存在を知らなかったとみるのが妥当であろう。とすると、キリスト教界に『常磐』の存在が広く知れわたっていたと言い切ることはできない。

『常磐』が創刊された1898(明治31)年は、家長父制を堅固なものにする明治民法が公布され、翌1899(明治32)年には高等女学校令が発せられて、良妻賢母主義教育の徹底がはかられた。このような社会状況の中、キリスト教精神に基づく合理的な家庭生活の推進を掲げた『常磐』の発刊は、意義深いものがある。後の1908(明治41)年、羽仁もと子・吉一夫妻により、キリスト教信仰を基盤とする中産階級の家庭婦人の啓蒙を目指し創刊された『婦人之友』は、今日も代表的な婦人雑誌の一つとして発行され続けているが、その『婦人之友』と『常磐』には、いくつかの共通点を見いだすことができる。双方が生活の基本をキリスト教の信仰においている点は言うまでもない。その他にも、読者との対話を重視し、読者の誌面作りへの参加を積極的に呼びかけた点。『婦人之友』においては、それが読者によって構成される「友の会」活動へと展開を広げる。また、文書活動と教育活動との連携を図

<sup>18</sup> 宮沢正典「『新女界』の終始」、同志社大学人文科学研究所編『『新人』『新女界』の研究 - 20世紀初頭のキリスト教ジャーナリズム - 』人文書院、1999年、24頁。『新女界』は海老名弾正を主幹、安井哲子を主筆とし、弾正の妻みやなどが編集に当たった。その内容は、キリスト教に関すること、婦人問題への啓蒙、家庭的な記事、文芸など多様であった。中嶋邦監修、前掲注15、148 - 150頁。

った点。『常磐』とメソジスト監督派教会女性海外伝道協会設立の女学校、『婦人之友』と自由学園との関係に類似性を指摘できる。『婦人之友』は、明治期の良妻賢母主義支配の環境にあって、婦人雑誌の新生面を開拓し、生活レベルでの様々な事柄を扱った画期的な雑誌であったという評価を今日得ている。<sup>19</sup> この評価はそのまま『常磐』にも当てはまるものであり、『婦人之友』より 10 年も早くそれを実践していたことは、婦人雑誌ジャーナリズムの歴史の中に刻まれるべきであろう。

羽仁もと子の編集者としての経験のルーツをたどると、メソジスト派教会の関係者との少なからぬ交流が浮かび上がってくる。『婦人之友』創刊以前の 1903(明治 36)年羽仁もと子は、その前年 1902(明治 35)年に母としての本分を研究する目的で結成された「明治母の会」の副会頭に就任している。そして同年夫吉一とともに雇われ編集者として創刊に携わった『家庭之友』<sup>20</sup>において、「明治母の会」の機関誌としての役割を担うことも引き受ける。「明治母の会」はカナダメソジスト教会の宣教師ハーパー・コーツ(Harper Havelock Coates)の妻であったアグネス・コーツ(Agnes Wintemute Coates)<sup>21</sup>を中心に、中央会堂(現在の日本基督教団本郷中央教会)を本拠地として設立された。『家庭之友』にはコーツ夫人による育児論、子供服の仕立て方、西洋料理の作り方などの記事が掲載され、また育児問答や家政問答の回答者としてコーツ夫人が起用されるなど、羽仁もと子とコーツ夫人の盛んな交流が窺える。東京には当時、明治母の会の他、四谷母の会、赤坂母の会、青山母の会、三田母の会、銀座母の会の 6 つの母の会があり、これに日

---

<sup>19</sup> 岡満男、前掲注 12, 36 頁。山下悦子『日本女性解放思想の起源 - ポスト・モダニズム試論 -』海鳴社, 1988 年, 121 頁。

<sup>20</sup> 『家庭之友』は羽仁もと子・吉一夫妻が内外出版協会の経営者であった山懸梯三郎に月額 30 円の報酬で雇われ発刊された雑誌で、夫妻は 5 年間その編集に携わった。1908(明治 41)年内外出版協会を去り、自ら『婦人之友』を創刊した。亀田春枝「明治母の会と羽仁もと子 - 『家庭之友家計簿』出版をめぐる -」, 近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』大空社, 1989 年, 307・330 頁。

<sup>21</sup> コーツ夫人は独身時代、カナダメソジスト教会女性伝道協会の派遣により 1886(明治 19)年来日し、89 年まで東洋英和女学校で教鞭を執った。89 年山梨英和女学校の創立に尽力し、初代校長に就任する。92 年にいったん帰国し、翌年ハーパー・コーツと結婚して再来日する。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、前掲注 6, 159 頁。

本在住の外国婦人母の会を加えて、連合母の会が結成された。<sup>22</sup> この母の会の活動を通じて、羽仁もと子が交流を持ったメソジスト派教会の関係者は、コート夫人に止まらない。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会派遣の宣教師として 1878 (明治 11) 年に来日し、同協会が設立した海岸女学校 (青山学院女学校の前身) の第 3 代校長を務めた後、同じメソジスト監督派教会派遣の宣教師ベンジャミン・チャペル (Benjamin Chappell) と結婚し、母の会の活動に積極的にかかわったメアリー・ホルブルック・チャペル (Mary Holbrook Chappell)<sup>23</sup> も、『家庭之友』の協力者の一人であった。<sup>24</sup> チャペル夫人については、アメリカに一時帰国した折に参加したワシントンでの母の大会に大いに感銘を受け、日本に戻ると早速数力所で母の会を開催したとのニュースが『常磐』に掲載されている (『常磐』2 - 6, p.37, 1899)。また彼女自身も、育児に関する記事を『常磐』に寄せている (『常磐』2 - 6, pp.7 - 13, 1899・8 - 11, pp.16 - 21, 1905)。その他、「手軽西洋料理」担当のピンフォード夫人との関係で、『常磐』とは縁の深いフレンド派のボールズ夫人 (Minnie Pickett Bowles)<sup>25</sup> や普連土女学校校長のサラ・エリス (Sarah Ellis) なども母の会の主要なメンバーであった。サラ・エリスは、ピンフォード夫人のピンチヒッターとして『常磐』の料理欄を担当したこともある (『常磐』8 - 2, pp.29 - 32, 1905)。彼女たちを介して、羽仁もと子が『常磐』を手にした可能性は十分にある。既に発刊実績を積んでいた『常磐』を、『家庭之友』や『婦人之友』の参考に眺めていたとするならば、日本の代表的な婦人雑誌にヒントを与えたものとして、『常磐』の婦人雑誌ジャーナリズム史に占める

<sup>22</sup> 亀田春枝, 前掲注 20, 298 - 312 頁。

<sup>23</sup> クランメル, J.W. 編, 前掲注 6, 119 頁。

<sup>24</sup> 「小児教育と社交」(『家庭之友』2 - 11, pp.337 - 339, 1905)、「我家の家庭教育」(『家庭之友』3 - 1, pp.7 - 8, 1905)、「我家の家庭教育 其一」(『家庭之友』3 - 3, pp.61 - 65, 1905) などと題して、チャペル夫人のコメントが寄せられている。また、毎月第三木曜日に、青山学院構内にあるチャペル宅にて、青山母の会が開かれているとの紹介もある。(『家庭之友』3 - 3, p.65, 1905)

<sup>25</sup> フレンド派宣教師ギルバート・ボールズ (Gilbert Bowles) 夫人。1893 (明治 26) 年 10 月 フィラデルフィア・フレンド女性海外伝道協会の派遣により、普連土女学校の教師として来日し、後にギルバート・ボールズと結婚する。戸田徹子, 前掲注 14, 80 頁。『婦人之友』創刊号 (1908 年 1 月発行) に「簡易なる茶話会の工夫」を寄稿しており、羽仁もと子との交流が窺える。

地位はより重要なものとなってくる。

最後に『常磐』の時事問題に対する姿勢に目を向けておこう。『常磐』が海外に関する情報を積極的に紹介していたことは、前章で「たび」と欄を取り上げた際、既に言及した。ポーカスとディキンソンの母国であるアメリカは、『常磐』が創刊された 1890 年代には、1869 年のワイオミングに続き、コロラド(1893 年)、ユタ(1896 年)、アイダホ(1896 年)の 3 州において女性参政権の獲得が実現した。また市町村レベルでは、カンザスの 1887 年に続き、アイオワで 1894 年に女性の参政権が認められた。<sup>26</sup> このような女性の権利獲得の成果を『常磐』は一切報じていない。もともとアメリカ本国においても、女性海外伝道運動は、女性参政権運動とは一線を画していた。<sup>27</sup> それに加えて、時事問題を論じることに対して慎重にならざるを得ない状況が、日本国内に存在した。それを説明するには、当時のジャーナリズム界を取り締まっていた新聞紙条例、出版条例に触れなければならない。

『常磐』が創刊された 1898(明治 31)年当時のジャーナリズム界は、1887(明治 20)年に改正された新聞紙条例、出版条例を遵守しなければならなかった。特に重要であったのは新聞紙条例第七条で、「内国人ニシテ満二十歳以上ノ男子ニ非サレハ持主社主編輯人印刷人トナルコトヲ得ス」とあり、外国人や女性に新聞の発行は許されなかった。だが、学術や技芸に関する事柄のみを扱った雑誌は、出版条例の範疇と規定され、出版条例には外国人や婦人に関する禁止条項はなかった。<sup>28</sup> したがって、『常磐』は出版条例に準拠する学術・技芸雑誌として発行されたことになる。出版条例に基づく雑誌が時事問題を論ずることは固く禁じられ、わずかでも学術・技芸を逸脱する内容を掲載すれば、厳しい処罰の対象となった。日本基督教婦人矯風会の機関紙『婦人新報』は、実質的な編集人・発行人は女性であったが、新聞紙条例に対処するため、名目上男性の編集人・発行人を立て、時事問題である廃娼に関する記事を取り上げた。<sup>29</sup>

---

<sup>26</sup> 栗原涼子『アメリカの女性参政権運動史』武蔵野書房、1993 年、106・108・113・128 頁。

<sup>27</sup> 小檜山ルイ、前掲注 4、92 頁。

<sup>28</sup> 三鬼浩子、前掲注 17、7・15 頁。

<sup>29</sup> 三鬼浩子、前掲注 17、31 - 33 頁。

『常磐』創刊の翌年 1899（明治 32）年、新聞紙条例が再度改正され、年齢満二十歳以上の帝国内居住者であれば、発行人、編集人、印刷人となることができるようになった。ただし、新聞紙条例に基づいて時事問題を論ずる場合、多額の保証金を前納しなければならなかった。<sup>30</sup> この改正によって、外国人と女性も時事を扱う新聞、雑誌を発行することが可能になったわけである。だが『常磐』には、1899（明治 32）年以降も、女性参政権や廃娼運動などの時事問題を扱った記事は登場しない。新聞紙条例改正の後も、『常磐』が出版条例に準拠する学術・技芸のみを扱う雑誌の枠内に止まっていたことは明らかである。『常磐』発刊の目的は、キリスト教精神に基づく合理的なライフスタイルの提示であり、それは出版条例に拠る雑誌であっても十分に遂行できるものであった。よって、高額な保証金を支払い、よりラディカルな雑誌に変身する道を選択するのではなく、日常生活のレベルにおいて日本人女性の啓蒙に尽くすという道こそが、『常磐』に託された文書活動(printed evangelism)としての使命であるとの信念を持っていたに違いない。

## 6. おわりに

女性宣教師による文書活動は、教育活動に主眼を置いた女性宣教師の研究、婦人雑誌ジャーナリズムの研究、いずれからもこれまで置き去りにされて来た感がある。しかし、上述したように、明治期における婦人啓蒙活動について論じる際、女性宣教師による文書活動は、双方の研究対象として、見逃すことはできない。本稿では、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会による文書活動を、雑誌『常磐』を中心として、紹介を試みた。ポーカスとディキンソンを支えた常磐社のスタッフについてなど、明らかにできなかった点は、今後の研究課題としたい。

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

<sup>30</sup> 保証金の金額は、例えば月 3 回以下の出版物の場合、東京では五百円であった。この金額は、当時の標準米一石の約 50 倍に相当する高額なものであった。三鬼浩子,前掲注 17, 46 - 48 頁。